

【6】 会員投稿欄

(1) ニッケルの島ニューカレドニア

－ 美智子妃殿下（当時）、筒井譲二氏 －

東京支部 篠崎 尚



ここは仏領ニューカレドニア、1973年4月の或る日の早晩、暗いうちにヌメアを出発した10数台の乗用車が、1時間かけ郊外のトントウタ空港に着く頃、丁度朝明けを迎えた。車に乗っていたのは在ヌメアの日本人駐在員とその家族達であった。

その二日前に在ニューカレドニア名誉総領事の筒井譲二氏から、オーストラリア、ニュージーランド2カ国を公式訪問される皇太子ご夫妻（当時）が、塔乗機の給油のためトントウタ空港に立ち寄られるので、出来るだけ多くの駐在員と家族に空港で両殿下をお迎えして欲しいとの要請があった。当時ヌメアにはニッケル取引関係日本企業（商社9社、ニッケル製錬5社、船会社2社、検査会社）の駐在員と家族で50数人の日本人が住んでいた。

朝日が空港一帯に射し込む頃、我々は粗末な二階建て空港ビルの屋上で機の到着を待った。暫くすると朝日に照らされた山並みを背景に、JAL機が反転し空港に向かって来るのが見えた。機は滑らかに着陸し、空港ビルの約50メートル離れた所に停まった。タラップの下ではフランス総督夫妻と政庁官吏、それと筒井名誉総領事夫妻が両殿下をお迎えした。そこから空港ビルまで筒井氏が皇太子ご夫妻をお導きした。



狭く薄暗い1階空港ロビーで我々駐在員と家族はご夫妻をお迎えすることになっていた。細

長いロビーの両側にふた手に分かれ立って待つこと暫くして、ご夫妻が入口にお見えになった。私の向かい側の列に皇太子殿下が、手前側の列に美智子妃殿下がそれぞれ別に参列者の前を笑顔で会釈されながら進まれた。両殿下は時々歩みを止められお声をかけられることがあったが短い時間であった。

こちら側にゆっくり歩みを進めて来られた美智子妃殿下が私の前で急に立ち止まれた。そして「どちらにお勤めですか。」とお尋ねになった。私が「兼松江商です。」とお答えしたところ「まあ、兼松さんですか。お懐かしいです。」と仰った。「兼松さんには米国、欧州旅行の際に大変お世話になりました。このたびも兼松さんの寄付で建てられたシドニー病院の兼松記念研究所（兼松記念病理学研究所）を訪問します。」と仰った。

私がたまたま昔お知りになられた兼松の人間であったからか、ニューカレでの生活とか業務についてのご質問等々の話に発展し、長い会話となった。ほかの参列者へのご対応に較べ異常に長い時間であった。ほか会話の詳細は記憶していない。

参列していたほか駐在員の奥さん達から、美智子さんは篠崎さんとだけ何故長くお話されたのか、何のお話をされたのか、と羨まれ妬まれた。彼女達はご婚約前とは言え兼松が美智子さんの米欧旅行でのご案内の名誉に浴し

た事を知らなかったのだ。

美智子さんがご婚約前の1958年に米国、欧州へのご旅行をされたが、当時非鉄金属部の山内宏さんのお父さんが日清製粉の役員をされていたので、その関係で兼松に旅行中のアテンドの依頼があったと聞かされていた。米国では橋本弥平社長のもと経理の坂田清平さんが美智子さんをご案内されたと聞き及んでいる。ロンドンでは矢張り経理の西川雅さんがアテンドされたと云う事を、バンコクで西川さんがそのように仰っていたと、かなり後になって兼松の取引先の人から聞いた。

筒井さんが名誉総領事に任命されたのは1972年2月であった。ご夫妻の2カ国ご訪問が決定され、途中給油のためニューカレドニアに立ち寄られる事になったので、外務省は急遽筒井さんを名誉総領事に任命したのだ。筒井さんにとり非常に名誉な事であった。その筒井さんが1978年に54歳の若さで亡くなった。脳溢血による突然の死であった。葬儀には兼松初代ヌメア駐在員であった岸村洋君（故人）が参列した。

筒井さんは兼松の監査役をされた筒井堅太郎氏の甥で、その関係で兼松のニューカレのニッケル鉱石の取り引きが始まった。非鉄金属部が恩義を感じている方だ。生まれはヌメア市。お母さんがフランス人だったので日仏二世。ヌメア生まれだが暁星中学、東京外語卒。戦時中は南方戦線。ポツダム中尉。戦後ニューカレドニアに戻り以後亡くなるまでヌメアで過ごしたが、戦前から日本国籍のままだった。奥さんの篤子さんはその後ニューカレを去り日本とパリで過ごされていたが昨年3月神戸で亡くなった。

筒井さんは森村桂の「天国に一番近い島」の中で、ニューカレ滞在中に森村桂が非常に世話になった人として紹



介されている。私の駐在中に森村さんがヌメアを訪れて来た。筒井さん夫妻は森村さんの来訪を大変喜び、筒井さん宅で歓迎会を催した。偶然にも森村さんのご主人は私の高校の同級生であった。森村さんはこの男と離婚し年下の人と再婚した。軽井沢に手作り菓子店「アリスの丘」を営んでいたが2004年自ら命を絶った。森村さんのファンであられた美智子皇后がこの店をご訪問された事がある。また森村さんの葬儀の際には弔電をお授けになった。

筒井さんの長女美和子さんはフラ

ンス人と結婚して以来ニューカレに住んでいる。長男（健二？）は神戸で筒井商会？を引き継いだ。当時8歳だった末娘の光子ちゃんは美人で一時パリに住んでいたが、帰国後結婚し今は我孫子に住んでいる。筒井家の人はお孫さんも含め皆さん美男美女なり。

私がニューカレに駐在したのは1971年7月からの2年半である。約45年前の事なり。

(2) 『よりどころ』

＝兼江会ニュース 300号によせて＝

名古屋支部 田邊義章



私は、日課とする散歩のコースを東、西、南、北と4本持っている。出掛ける時には「北へ」とか、「南へ」とか、内へ一言告げて出るのが習いである。その一つ、東コースの途中で真宗大谷派のお寺がある。その山門に立つ掲示板に、次の説法の一句が書かれていた。

『人はよりどころがなければ』

生きていくこともできない

また、死んでいくこともできない』

私は思わず足を止めさせられた。「よりどころ」という文字に引かれたのだ。

掲示板の説法は、住職自身の手で月替わりに書かれる。お盆向けにでも書かれたものか、勢いのよいチョーク文字がくっきりと白く光っていた。私が「よりどころ」という言葉を目にするのも、口の中で言ってみるのも久し振りの気がした。否、ずーと昔から忘れ去ってしまっていたようにさえ思った。

「よりどころ」を辞書で引くと、漢字では「拠」と書き、あまり難しい意味は記されていない。しかし、その日の私には、「よりどころ」の一語にずしりとした重い意味合いが感じられた。と同時に、自分自身の長い人生における「よりどころ」について、今までに本当にきちんと考えたことがあったのだろうか、との自問が体を走った。

兼江会ニュースが「300号」に到達することを教わったのは、去る6月末の名古屋支部から受けた電話によってであった。指折り数えてみても、その始まりも歴史も見当がつかない。折からの話題であったイチローの3000本安打にも匹敵するような凄い数字だと思った。いずれにしても、「300号」達成への祝意と永年のご尽力への感謝を申し上げたい。

その「300号」の受信以来、2カ月ほど過ぎた8月末、上記の「よりどころ」の説法の一句に出会ったのだった。

私は、改めて手元にある「兼江会ニュース」のNo.298を手にして開いてみた。どの頁からか、「元気ですか。私たちも、KGも、変わらず頑張ってますよ」との呼びかけが聞こえてくるように思えた。私は、自分にとってKGと兼江会、そして兼江会ニュースという誇り高き「よりどころ」の存在を、今までになく心強く思う。

(3) 文化祭芝居のこと、火山噴火のこと

東京支部 木下 昇



入社二年目の1964年は創業75周年ということで運動会と文化祭が盛大に行われた。運動会では通常の各種競技の他に部門対抗で仮装してパフォーマンスを行うという催しがあり、食糧部では祭りを演出するということで、みこしを作り揃いの法被を着てグラウンドを練り歩き衣装賞を頂いた。その時の集合写真が一枚残っていて今は高齢になった方々や故人となられた方々の若々しい姿が懐かしい。ワイワイ言いながら準備をする中で普段あまり交流のない他の課の方々との距離が近くなったことは幸いであった。

観劇部というサークルがあって時々演劇をともに観て合評会などやっていた。文化祭となれば我々もやらなくちゃということで舞台に立つことになった。観るだけの素人集団が急に芝居を出来るわけもないが当時丹羽さん（役者名 沢りつお）というプロの劇団員がコピー室にアルバイトで勤務していてその指導を受けた。演目は椎名麟三

作「相宿」、プロだけに彼の指導は厳しく、せりふ回し、ちょっとした所作など注文も多く、だれしも自尊心を傷つけられながら練習に励んだ。なにしろ男性陣はほとんど関西出身で訛りが抜けない。今は故人となった石油の田口さん、財經の松本さんも苦労していた。私は落ちぶれたやくざという役を頂いたが、舞台に立つのは小学校の学芸会以来でその後も、そして今後もないと思うので生涯に一度の舞台ということになる。関西訛りはちょっとやそつとでは抜けない、やくざなら関西系もありということで勘弁してもらった。せりふ自体を覚えるのにさほど苦労しなかったと思うのだが、今日に至るまで年に数回は、何かの芝居に出演していて幕が上がっているのにせりふが全く出てこずに焦っている夢を見る—不思議だ。この観劇仲間との付き合いは今日まで五十有余年に及ぶ。この兼江会記念号が発刊されるころには、恵比寿でテアトルエコー公演「幽霊屋敷」をともに観ていることと思う。1964 年は新幹線が開業し東京オリンピックもあって日本中が明るく活気に満ちていた。新幹線といえば私が初めて乗ったのは大阪での従業員組合会議に出席した時で、帰京すると当時の部長に「お前はもう新幹線に乗ったのか、俺は、まだだ」とやや羨ましそうにいわれた。組合員の一部には「組合の会議に新幹線は贅沢だ、夜行列車で行け」という意見もあった。そんな時代だった。



落ちぶれやくざ役の私（木下）
後に写っているのは財經の樋口さん



蛇を持って OL 達を驚かせている
のは財經の松本正さん（故人）

セントヘレンズ山はワシントン州にありシアトルから南へ 154 k m、ポートランド/オレゴンから北東へ 85 k m の地点に位置する。富士山によく似た美しい山だった。1980 年 3 月初め私は 2 回目のポートランド勤務となって赴任したが 3 月 20 日には同山を震源とする M4 の地震があり、地元新聞レゴリアンが噴火近しとして連日情報を伝えていた。

そしてついに 5 月 18 日 8 時半過ぎ M5 の地震に続いて大噴火がおき山頂が吹っ飛んだ。この日は日曜日で、ポートランド港主催の定例懇親ゴルフがあり、米国の穀物会社日本商社の主要メンバーが参加していたが、ゴルフ場から爆発噴火の瞬間が遠望できた。

私はカーギル社員とラウンドしていたが小麦や農産物への影響について作柄にはさほど大した影響はあるまいなどと話していた。しかし事態が次第に明らかになるにつれ、予想もしなかったところに大問題が発生した。火砕流や土砂、樹木等が流れ込んでコロンビア川が埋まり、日本向けの小麦を積んだ船が出港できなくなり、またこれから積み込む予定の船がサイロエレベーターのところに入れなくなった。天災ではあるが、契約の不履行、遅延はサイロの保管料、本船の滞船料、食糧庁への違約金、需給への影響など問題山積。

同業他社や関係者との連日の対策協議でしばらく異常事態が続いたが、米当局の迅速な対応、関係者の努力により懸念したよりも早く事態は収拾できた。なお、余談ながらこの噴火で名物のマツタケの産地も大きな被害を受けた。ポートランド市街にも連日灰が降り注ぎ、マスクが不足し 1 ドル 50 セントが 5 ドルに値上がりし、車の掃除に追われる日々となった。

この年の夏は早魃で華氏 110 度を超える日もあり、あるプロジェクト調査のため東京から出張の川村さん（故人）と NY 駐在の吉澤さんとカンサス州をレンタカーで走行中車から煙が出始めなんとかモーターについて車の下を見たら真っ赤に焼けていて危うく事故になるところだったと肝を冷やした。

秋には松浦社長の急逝がポートランド事務所にも伝えられ衝撃をうけた。夏には大平首相が急逝しておりトップの

重圧というものが心にしみいった。

私事ながら私の父もこの年亡くなり一時帰国して葬儀を行った。忘れられない年である。経済的には台頭する日本に米国が警戒の目を光らせはじめ、政治的には、前年末のソ連によるアフガン侵攻に抗議してモスクワオリンピックボイコット問題があり、なにか騒然とした年でもあった。

—— 寄稿の機会に茫々たる往時を振り返ることとなった。記憶は不確かで記憶違いがあるかも知れない。しかし縁につながった方々の温もりとこれまでの日々への感謝の心は確かなものである ——。

(4) KG ローターゴルフ会

大阪支部 橋本 猛雄



KG ローターゴルフ会の第 1 回開催は平成 7 年（1995 年）4 月 8 日（土）です。以来、20 年余、神戸市のローターゴルフ倶楽部で開催され、平成 28 年（2016 年）7 月 1 日（金）で 240 回を数えました。

KG ローター会の開催の思い付きはゴルフ好きの仲間たちと月に 2～3 回ゴルフを楽しんでいましたが、ある時、定年も近い事でもあり、今後どうするか、との漫然とした話の中で思いついたものです。

幹事は当初、入江一雄氏、松森靖氏、桜間善造氏、辰田良三郎氏、橋本猛雄の 5 名で始めました。会の簡単な取り決めは；

- ◎ゴルフが好きで、KG の人にとらわれず、ゴルフ好きの友人は歓迎する。
- ◎HC の決定は 30 回毎に改正する。
- ◎皆でゴルフを楽しむために、マナーの向上に向けて、エチケット・リーダーを決める。
- ◎平均年齢も現在 75 歳、上は 83 歳でもあり、希望者は難関の池、谷越えの 3 ホールをゴールドシニアティから無罰でスタートできる。

- ◇ 参加者は延べ約 100 名を数え、4 組の夫婦も参加しています。現在、KG ローターゴルフ会の HC 取得者は 32 名（内、KG 以外の方は 14 名です）現在、開催は毎月第 1 金曜日（1 月と 5 月は第 2 金曜日）です。参加希望者大歓迎です。男女、年齢は問いません。よろしく！！

- ◇ 記念パーティーは過去 3 回開催されました。

100 回記念は平成 16 年（2004 年）2 月 27 日、出席者 36 名

200 回記念は平成 25 年（2013 年）3 月 15 日、出席者 36 名

230 回記念は平成 27 年（2015 年）9 月 11 日、出席者 24 名

幹事がいろいろな賞を考えて、パーティーを盛り上げています。いろいろな事がありますが、皆で和気あいあい、楽しむことをモットーにしています。後何年続けられることでしょうか。



KG ローター会 200 回記念懇親会 2013 年 3 月 15 日

(5) 吉村さんと日中戦争

大阪支部 松本 健太郎



化合繊維原料部時代の上司吉村基泰さんのご夫婦と田頭さんと私の 4 人で会食をしました。久しぶりの会食でした。

「吉村さん、お久しぶりです。お元気ですか」

「体の方は何とかね。でも頭のほうはパーだよ。僕は父親が 40 歳、母親が 50 歳で亡くなったから、両親を足したよりも長生きをしたよ。エーといくつになったかな」

隣の奥様が「92 歳ですよ」まあこんな調子の会話でしたが、話は例によって中国時代の話になります。ご存知の方も多いと思いますが吉村さんは中国は青島生まれで青島育ちで、戦争末期はその中国語能力を買われて情報将校をしていました。我々化合繊維原料部のメンバーは中国時代の話はずいぶん聞いてきました。

「弟や妹を連れて船で日本に帰るとき、家の使用人がマントウをたくさん作ってくれて、涙を流して言うんだ『吉村さんどうかご無事で帰国して下さい。船の中は何もないのでこのマントウをお持ちください』とね。僕は中国人はつくづく偉いと思うよ。これが逆だったら日本人はあそこまで寛容になれたかどうか。今まで軍勢力を背景に日本人は散々えばっていたんだ。他人の国に土足で上がりこんでだよ。中には中国人のことをチャンコロと言って馬鹿にするような奴もいたしね」 こういう話になると吉村さんは 70 年ほど前の事実の記憶がよみがえるだけではなく、当時の感情の記憶が生き生きとよみがえて来るようです。さっきまでの好々爺然とした吉村さんから若い頃のあの多少ヤンチャな吉村さんが戻ってきます。吉村さんから中国時代の話は何度も聞いてきましたが、こういう話は初めてでした。

私は一つ質問をしました。「良し悪しは別にして満州事変までは一応の動機はわかりますが、1937 年から始まった日中戦争はどうしても何が目的だったのかさっぱりわかりません。まさか中国全土を占領しようとか植民地化をしようと思ったわけでもないでしょう」吉村さんの答は意外なものでした「要するに調子に乗ったんだよ。もしもあの時、日本が負けていなければ先でもっとひどい目に会っていただろうね」

私は吉村さんの答えを聞いて少々驚きました。全く同じ趣旨の発言を 70 年以上前にしていた人がいるからです。その人は他でもないあの世界的な名指揮者の小澤征爾氏の父親の小澤開策です。

小澤征爾氏が 2014 年 1 月の日経新聞に私の履歴書で書いたものを原文のまま記します：

15 日、敗戦玉音放送を家族で聞いた。おやじが僕たち兄弟に言った。「日本人は日清戦争以来、勝ってばかりで涙を知らない冷酷な国民になってしまった。だから今ここで負けて涙を知ることはいいことなのだ・・・」

小澤開策という人は 1931 年の板垣征四郎や石原莞爾が起こした満州事変を当初は熱烈に支持し、満州協和会の幹部も勤めたことのある人です。そういえば征爾という名も板垣征四郎と石原莞爾から 1 字づつもらったと言うことを何かで読んだことがあります。

当初は満州帝国建国の理想である五族協和を素朴に信じていたようです。そのうちに建国の理想が変質してきたのを見て軍部を批判したので憲兵隊にずうっと付けねらわれていたという異色の人でした。

吉村さんの話も開策の話も表現は多少違いますが殆んど同じ内容ではないでしょうか。

第一に日本は日清戦争、北清事変、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変とあらゆる戦争に勝ち進んできた。その結果調子に乗りすぎた。

第二にこのまま行ったら(あの敗戦がなかったら)、先でもっとひどい目にあっていただかもしれない。

吉村さん、小澤開策と出たところでもう一人歴史上の有名人の著書を紹介したいと思います。戦時中のビルマ首相で 1943 年の大東亜会議にも出席した親日派のバー・モウの著書「ビルマの夜明け」です：

日本の軍国主義者について言えば、彼らは精神的にあまりにも人種的意識が強く、あまりにも一方的な考え方をし、その結果として、全く他人を理解することができず、また他人に自分たちを理解させることができなかった。……

日本の事例は本当に悲劇である。歴史的に眺めてみると、日本ほど、アジアを白人の支配から開放するのに尽くした国はほかにどこにもない。にも拘わらず、開放を援助し、または、いろいろな事柄の手本を示したその人々からこれほどまでに誤解されている国もまたない。日本はその軍人と人種的幻想により裏切られてしまった。もしも、日本が自分のアジア的本能に忠実であったなら、そしてもしも、日本が戦争の当初から宣言した「アジア人のためのアジア」を忠実に守ってさえいたら、日本の運命はぜんぜん違っていただろう。そうしていれば軍事的敗北で、アジアの半分、あるいはそれ以上の国々の信頼と感謝とを失うことはなかったのだ

吉村さん、小澤開策、バー・モウの 3 人が同じようなことを述べています。もちろんこの 3 人はあの過酷な同時代を過ごしたという以外に何のつながり也没有せん。その 3 人が期せずして同じ趣旨の発言をしていることは大変興味深いことです。国でも個人でも成功体験が続き調子に乗ると言うことはつくづく恐ろしいことだと思います。そういえば最近にわかには大国として台頭してきたあの国の指導者の人たちは日本の失敗をどのように見ているのでしょうか。又機会を頂ければこの辺のところも論じてみたいところですよ。

(6) 私 と ス キ ー

東京支部 庄野 一夫

昭和 41 年兼松に入社した私は、すぐに厚生会所属のスキー部に入部しました。

私とスキーの出会いは大正生まれの母に連れられ、小学校高学年の頃初めて行った岩原スキー場でした。母は学生時代女性のスキーヤーなどほとんど見かけない時からスキーをやっていたようで、その影響で私もはじめたのですが、周りからは「君は北海道の出身か？」と何度か聞かれた記憶があります。こう見えても私は三代続いた「江戸っ子」ですが、スキーをやるのは雪国育ちと思われていた時代でもあり、よほどの物好きと見られていたのかもしれない。



そんな私に入社後、兼松社内報に「私の夢」という題材で何か書いて欲しいと言われたのですが、元々筆不精で書くことはあまり好きではなかった私でしたが、下っ端の身であり断り切れず、やむなく投稿したのが、「私の夢は北海道の粉雪の中を一人雪煙を上げて滑りたい」というものでした。

その結果、社内報を見た仲間からその後 2、3 年はシーズンが来ると「お前行ったのか？」などと聞かれますが、無論全く行っていませんし、その予定すら立っていませんでした。

今でこそ北海道スキーツアーはどこの観光会社のパンフを見ても当たり前のように出ていますが、当時は航空機の予約も大変、鉄道は時間が掛る、宿の手配はなどなど問題山積み、さらには、会社勤めの身で気楽に長期休みも出来ないと事実上不可能な話でありました。それでも私なりに、夢と言うのは実現困難、もしかしたら事実上不可能だからこそ「夢」なんだと強がってはいました。



当時のスキー部の活動は、会社も今のように週休二日制など無く土曜日は半ドン、昼に仕事が終わるとすぐに上野駅に駆けつけ急行列車に飛び乗って、夕方にスキー場到着するとまず夕飯をかきこみ、リフトの終了までナイターで滑り、翌日もリフトの運行開始に合わせ宿を飛び出し夕方までガツガツ滑って自宅に帰るという生活を、時には 10 週間連続という超人的なスケジュールでこなしていました。こんな状態なので行く先は精々長野が新潟辺りで、北海道など全く入り込む余地はありません。その内周りもそんな私の夢などすっかり忘れ去り、私自身もそれを胸の奥にしまい込みただ時が過ぎて行くだけで、夢は夢で終わるのだなと思われました。

時は流れ 1999 年、KG の大変革の時を迎え私も会社を去りましたが、ある公団に職を見つけその後そこに 11 年勤務することとなったわけですが、KG とそのグループしか知らなかった私ですが、公団という組織に入って色々な面での違いに驚かされることが種々ありました。一口で言うなら民間に比べ全く楽、その一つは休暇に関するもので、入るとすぐに 20 日間の年休がもらえ、更に 3 月までに消化していないと、人事関係や上司から休みなさいと勧告されます。

このお蔭で、「そうだ俺には夢が有ったんだ。北海道にスキーに行こう」と言う訳で、2004 年手始めに北海道の



(七飯スキー場にて筆者)

函館の大沼公園七飯スキーに行きました。夢の中では粉雪の中で滑ることになっていましたが、ここは残念ながら北海道でもあまり雪質は良くなく、その点は残念でしたが、ともかくついに夢は実現したのだと言う達成感と高揚感を味わうには十分。その後夢は一段と広がり、どうせなら道内の有名スキー場を片っ端からと、キロロ、富良野、ニセコ、トマム、サホロ、ルスツと観光会社のカタログにある場所を次々と走破したわけです。



(富良野スキー場
喫茶店森の時計)

残念ながら夢の実現を伝えるすべはありませんでしたが今回兼江会 300 号記念が発行されるということで三十数年前に兼松社内報で語った夢の完結編を OB となった今、兼江会会報に投稿しようと思い立ったわけです。当時を知るスキー仲間も今や皆 OB 丁度いいよと思った次第です。

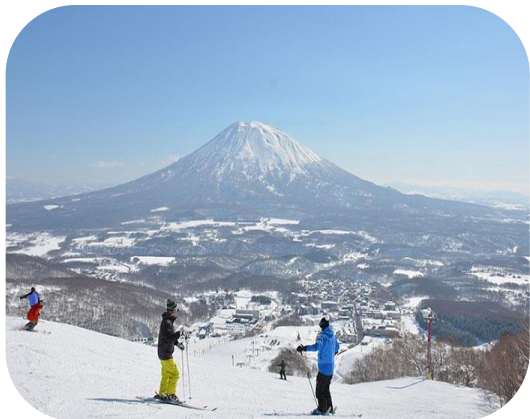
終りになりますが、偶然に 2015 年夏号の兼松社内報を貰い読み進めると後ろの方にクラブ紹介記事が載っ



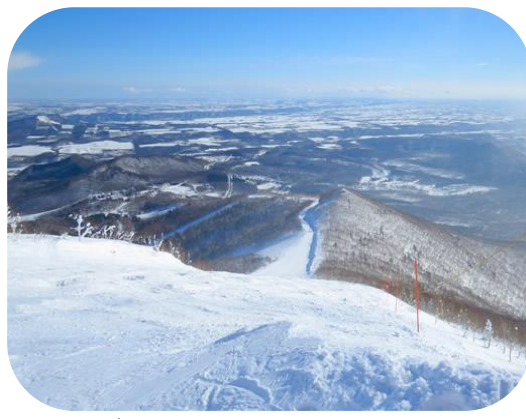
(大沼七飯スキー場にて筆者)

ていました。その中に「全商社スキー・スノーボード大会第 54 回実施」の記事がありました。私がスキー部キャプテンの 1969 年、第 8 回商社スキー大会を兼松スキー部が幹事で白樺湖で実施しました。当時幹事会社は大会会長に自社の役員などを当ててきました。私はすぐに 1932 年ロス五輪 100 メートル背泳金メダリストで同年 IOC 委員に就任の清川正二常務こそうってつけの会長とすぐお願いに行くと、趣旨を聞かや、さすがスポーツマンの清川さん、二つ返事で引き受け当日は現地に出向き 156 名の出場選手団（参加 13 社、各社男子 7 名・女子 5 名出場）及び大会関係者など多数の前で挨拶を頂くことができた思い出深い大会でした。

スキー部はもう存在していないものと思っていた私ですが、名称は昨今のスキー事情を反映して、スノーボードが加わってスキー・ボード部とはなっていますが、確かに 54 回目の全商社大会が行われました。指折り数えると 46 年の時の流れの中で、商社大会は脈々と続いていることが分かり何かうれしい気持ちにもなりまし、今後とも体の続く限りスキーを人生の友としてやっていきたいと気持ちを新たにしました。



(ニセコスキー場と羊蹄山)



(サホロリゾートスキー場とサホロ岳)

(7) K G大阪・神戸テニス部活躍の軌跡

大阪支部 石原 正紀、高橋 悦雄

1 : <現在の状況>

ここ数年、毎年 10 人位だが 4 ～ 5 月に集まって、テニスと懇親会を開催。テニス部 O B 会の始まりは、平成 5 年田中のコートだったが近年は神戸ローンテニス倶楽部、今年は阪急仁川テニス倶楽部で、メンバーは、竹田和也、石原正紀、河野光宏、神谷邦夫、今崎良平、八田泰夫、植田泰至、高橋悦雄、柴山隆彦、萩原真一、田中領、高橋和也、大久保信一、柳原尚子、萩原恵美子（旧姓：市原）、高橋悦子（旧姓：河村）、等。他に石田朱美（旧姓：森田）、植田典子、上原恵子（旧姓：三上）等が見学に来る。

数年前迄は、（故）松村武彦さんが懇親会でハーモニカを吹いたり、茂松正人さんが幹事をしたが、ご逝去。皆、普段は、其々住まいの近くのテニス倶楽部に属して、プレーをしている。プレーが無理なら懇親会に、それも無理なら見学に。とにかく集まろうがモットー。

2 : <戦後から昭和 4 5 年位まで>

戦後に兼松が入手したと思われる神戸市東灘区田中のテニスコート 3 面が大阪支店と神戸本店との共同の練習場所であった。終戦直後、ビルマ支店から福岡支店長として帰国された名プレイヤー（故）神谷邦豊（常任監査役）は、昭和 2 3 年に神戸本店に転任、神戸ローンテニス倶楽部でも活躍されながら（国体では兵庫県の選手／監督として 10 連覇）、戦後の兼松テニスの礎を築かれた。戦後しばらくは、硬式テニスのボールの値段が現在とあまり変わらないほど高価であったこともあり、テニスと言えば軟式テニスが中心であった中で、硬式テニスが盛んであったのは、阪神を中心とした関西、東京・神奈川の関東及び福岡を含む北九州くらいで、ハイカラなスポーツであった。そんな中、兼松は、昭和 20 年代中頃、上記神谷に加え、福岡支店から、九州のテニス



石原 正紀



高橋 悦雄

界で活躍されていた関栄蔵が大阪に転勤、また当社ゆかりの神戸大学から（故）時岡正治、井上明敏、（故）橋本英一、（故）和田喜生らをはじめ、他大学からも錚々たるプレイヤー、土居俊彦、（故）須藤信勝、荻山晃、良峰信雄、田中雄二、辻村俊昭らが入社、業界では勇名を馳せた。その後、昭和 35 年にはデビスカップ候補選手の河野光宏（関学）が入社、また江商との合併で（故）松村武彦らが加わり、対外戦の六社会、綿友会、棉花大会などは赫々たる戦績を収めた。

3：＜昭和45年位から平成10年頃まで＞

この頃は関栄蔵、（故）茂松正人、神谷邦夫、柴山隆彦等が中心となってクラブを牽引、対外戦の綿友では兼松江商、伊藤万、伊藤忠、丸紅、ニチメン、金商又一等が参加した。

その中でK Gは、S61年に優勝したが、大体2～3位ぐらいの位置付け、全日本級の選手をそろえた伊藤忠・伊藤万がトップだった。六社会（後五社会）では兼松江商を始めとした安宅産業までの総合商社のうち六社で試合をしたが、昭和45年以降は、K Gの優勝はなかったけれど上位だった。社内戦の四店対抗（後三店対抗）では、大阪は大体1～2位、東京といいとこ勝負、最終的には東京が少し強かったか。夕刊フジ杯に於いては昭和58年大阪地区の企業間大会で優勝し、同年に東京地区優勝の日本興業銀行と東京で決勝戦を行い、全国優勝した。ご褒美に夕刊フジ社から台湾でのテニスツアーに、神谷、柴山、崎山、柳原他4名が招待された。

◇ 当時のメンバー

（男性）（故）松村武彦、関栄蔵、（故）橋本英一、辻村俊昭、河野光宏、石原正紀、（故）茂松正人、太田泰雄、神谷邦夫、八田泰夫、植田泰至、高橋悦雄、（故）中村賢、藤田和彦、柴山隆彦、（故）岸田莊二、高砂和憲、蕎麦谷、中川高男、萩原真一、（故）石田直孝、高橋和也、大久保信一、谷祐二郎、宮下雅行、黒川哲宏、
（女性）（故）矢野孝子、竹内修子、森総子、柳原尚子、（故）森り子、市原恵美子、（故）小林茂美、尾浦、平田多恵子、河村悦子、柿原和代、崎山嘉子、西村弥生、水田豊枝、市口、水野賀世子、村田操（すべて旧姓）

K Gは社会人クラブとしては、テニス好きが多く、強かった。又、当時は合宿（テニスやスキー）も多く（蕎麦谷マネージャーが企画）、楽しい思い出となっている。テニスクラブ内の結婚も7組ほどあった。

バブル崩壊後、テニス部員も減りつつあったところに、平成7年1月、阪神大震災が勃発、賃借していた芦屋市松浜コートにも地割れなどが発生し、使用不可能となり、テニス部も自然消滅とならざるを得なかったことは、誠に寂しい限り、ここに、往年のK Gテニス部活動の一端を記してその雄姿を偲びたい。（敬称略）



後列 大久保信一、萩原真一、柴山隆彦、八田泰夫、高橋和也、植田泰至
前列 柳原尚子、石田朱美（旧姓：森田）、植田典子、高橋悦雄

(8) 連鶴 — 1 枚の紙から折りだす不思議の世界 —

東京支部 木村 敏博



折り紙は、一枚の紙を折り込むことで、造形的にも美しい立体を作り出す日本の誇る文化。私は、昔から折り紙に親しんでおり、娘のためのお雛様 15 人揃いを折り紙で作り上げた事もあった。

数年前に「秘伝：千羽鶴折形」という書籍に出会ったことから私の連鶴作りは始まる。一枚の紙に切り込みを入れるだけで複数のつながった鶴を折るという「連鶴」の世界に引き込まれ、今や私のライフワークとなっている。

1. 折り紙について

そもそも、「折り紙」は、神社や作法などで使われる御幣、熨斗などの「儀礼的折り紙」と大衆が遊ぶ「遊戯的折り紙（以後、折り紙はこれを指す）」に分けられる。折り紙は、紙そのものが高価だった事もあり、庶民大衆が楽しめるようになったのは江戸時代以降。当時は、「折り紙」とは言わず「折居」と呼んでいたようで、井原西鶴の「好色一代男」の中にも、「折居」として紹介されているが、当時はまだ白い和紙であり色折り紙や千代紙のような模様折り紙は江戸末期から明治にかけて大衆に広まっていく。折り紙の模様は、元々は大衆に普及した手ぬぐい、風呂敷などで発展した模様や着物の絵柄を写したものであり、これに色使いができるようになり、今の折り紙に発展していく。江戸末期から明治にかけて、紙が普及、大衆消費できるようになっていった折り紙は、庶民の生活を楽しむものとなっていった。その後、折り紙作家が多種多様な折り紙を発表。文化から芸術の分野にまでなろうとしている。折り紙は、「Origami」として世界共通の言葉となり、日本の作家のみならず、全世界に多くの折り紙作家を生み出している。特に、ヨーロッパ、アメリカには著名な Origami 作家が多い。

2. 連鶴の歴史

前述した「秘伝：千羽鶴折形」は、現存する世界で最古の遊戯折り紙の本と言われている。これは、1797年に三重県桑名市の長円寺住職「魯縞庵義道」がまとめたもので、49種類の連鶴の折り図が紹介されている。技法的に確立された色々な折り方が紹介されており、「百鶴」と呼ばれる作品は1羽の親鶴の周りに96羽の小鶴



がつながって乱舞している造形的にも見事な作品。当時は、まだ色折り紙がなく、白の和紙での製作であった。その後、折り紙は庶民の遊びとして広まっていき、浮世絵にも紹介されているが、技術的に難しいこともあり大衆に広まるまでには至らなかった。大半の方が連鶴を知らないのは当然と言える。「千羽鶴折形」の地である桑名市では、市の無形文化財に指定され、桑名市の小学校では連鶴の時間が設けられているなど、桑名市の市民生活に溶け込んでいる。このように「連鶴」は、中部地方では、比較的知られているようだが、他の地域ではほとんど知られていない。技術的な問題もあり、誰でもできるものでもないからだろう。連鶴だけの作品展などは、ほとんど見られないし、ましてや、海外では全く無名である。

3. 私の連鶴製作

上述の千羽鶴折形にであった当時は、折り紙の一分野であったが、数年前に千羽鶴折形49種類を全て折りあげ、連鶴の基本的な技法を体得した後、多様な技法を組み合わせれば新種の連鶴ができると思うようになり、当初は技法の組み合わせでの新作製作から独自の技法開発に進み、またそれらの技法を組み合わせでの新作創出とつながっていった。紙の一部にスリットを入れ、そのスリットを一部の紙を通して折り出す「スリット通し折り」は私独自の技法。これにより、新作がどんどん生まれるようになった。2016年9月末時点で800種を超える連鶴作品ができあがり、100均のクリアケースなどにいれて全種類を我が家に展示している。今や、壁面の半分近くが連鶴作品の展示スペースになっており、さながら「連鶴博物館」の様相になっている。妻からは白の壁がなくなってしまうとクレームあり。常時オープンハウスで観覧していただけるので、観覧希望あればご連絡を。

2A 羽でつながる (両面折紙だと2色に)



連鶴は、「折り図」という設計図を考え出すことから始まる。折り図を紙に写し、頭の位置を決めて切り込みを入れながら一羽ずつ丹念にきちんと折っていく。時には考えた折り図で新作がきちんとできないこともあり、試行錯誤もよくあること。

最近、夜明けに、「連鶴大明神」が枕元に降りてこれ、新作折り図を賜ることもしばしば、こうなると、寝起きから完成まで他の事は手

につかない。世界で誰もつくったことがない新作連鶴を創り出す興奮はなにものにも代え難い感覚なのである。最近、一つの新作発案からその横展開の形でシリーズものを創作することもあり、毎月 10~20 種類の連鶴新作が生まれている。9 月末時点で 800 種類を超えたが、これからも新作制作を続け 1,000 種類の連鶴新作に挑戦していくつもり。そのうち、「連鶴 1,000 種」の自費出版もしたいものだ。

4. 千羽鶴連鶴への挑戦

昨年夏、今年夏には、千羽鶴連鶴—曼荼羅シリーズ 2 作品を制作発表した。共に、1,000 羽の鶴がその一部で他の鶴とつながっている 90cm 四方の大作である。写真の「曼荼羅 2 一月光」は、128 cm 四方の無地の和紙（ユネスコの無形文化財となった埼玉県細川和紙）を使い、できあがり想像してスプレーで着色、折り図を裏面に写し、切り込みをいれては 1 羽折り、切込をいれては 1 羽折りを一月半かけて制作したもの。随所に連鶴の基本形を折り込んである。それぞれの鶴は 4 cm 四方（一部に 8 cm 四方など）でいられている。制作期間中は、手が震えたり、集中力が途切れないようにするため完全禁酒であり、まさに「苦行」の時間ではあった。切れてしまっただけで台無しだから、飼い猫に遊ばれないようにしないといけないし、神経はすり減らすし、腱鞘炎にはなるで、もう挑戦することはないだろう。恐らくは、世界中探しても、千羽鶴の連鶴を実際につくったのは私だけであろうと思う。そんな酔狂な人間が私以外にいるとはとても思えないのである。



5. 広がる連鶴の世界

2 年前から、連鶴の作品紹介と折り方の動画を Youtube に投稿している。「童夢 連鶴」で検索していただければ 40 数本の私の投稿作品を見ることができる。折り方の動画は、折り図に加え、折り順がわかる写真、動画を入れてあり、製作時のコツなどのコメントも入れてあるので、初めての方でも折り紙を楽しんだことがあるかなら楽しめると思う。最近、毎月の連鶴新作を折り図とコメント付で投稿しているので、新作に挑戦したい方は挑戦していただきたい。また、最近、twitter や Instagram にも投稿している。Twitter では国内の折り紙仲間との情報交換（千羽鶴連鶴への挑戦もここでその気になった）が多く、Instagram では海外の反応が多い。Facebook（木村敏博）でも連鶴の新作を日々その都度開示している。

また、埼玉県を中心に市役所、公民館、市民ギャラリーなどで連鶴の展示会（折り紙団体との共同展示や個展）なども積極的に進めてきており、また、市のボランティア活動の中で、小中学校、介護施設、病院、地域のお茶会、オレンジカフェなどでの無料出張講習なども行っている。ご希望の方であればご連絡いただければ世界中どこでも交通費だけで伺います。加えて、自分でも連鶴を作りたいという方に、小規模ながら自宅で毎月一回開催の連鶴教室を開催し



ている。結婚祝い、誕生祝い、新築祝いにと受注製作も、ちょこちょこいただくようになった。

埼玉県は豪州クイーンズランド州と姉妹都市提携をしている関係から、近くの白岡高校に毎年ホームステイでやって来る高校生の修了書記念品として連鶴を制作提供している。私の連鶴作品も最近、海を渡って海外にも広がっていくのはうれしい限り。2020 年にむけて海外からの日本熱はさらに高まっていくだろう。連鶴が日本文化の架け橋に役立つのなら、どこにでも出かけて行きたいと思っている。

(9) 青春の 20 代、「数」と「人」、年賀状

東京支部 小畠正徳



商社も兼松も知らなかった私は、S41 年数学が縁で兼松に入ったが、配属は当初の話と変わり、IBM 導入間もない事務合理化室ではなく、八重洲口会館にあった繊維機械部だった。仕事も頑張ったが、野球部・サッカー部・スキー部と掛け持ちで走り回り、半ドンの日曜日は、仕事こそそこで、グラウンドやゲレンデへ出掛け汗を流していた。

良き会社の良き時代が残っていて、毎月「誕生会」なるものがあり、定時後に当月生まれの社員が集まり、会社持ちで役員以下と懇親するもので、12 月生まれは少なかったが、同じ部にいた M さん、Y さん、人事部で同期の K さんもいた。入社 2 年目の誕生会では、私と同じ 12 月 20 日生まれの新人・社長室の N さんとの出会い、意気投合、それから 3 年後・大阪万博の 1970 年 12 月 20 日に結婚したが、私 27・家内 22 の誕生日当日の挙式で、披露宴は社内の集まりの様でもあった。

当時は社内結婚が多く、12 月生まれ組の M さんはスキーが縁で私と同期の S 君と、Y さんはボーリングが縁で隣の部の S 先輩と、K さんはヨットが縁で私と浦和高同級の M 君と結婚、家内同志も皆仲良し組だった。私は浦和一筋で、M 君・S 君も大宮と近く、ファミリーでテニスやスキーをやったり、夏休みには、軽井沢・箱根など会社の保養所へ一緒に出掛け、子供達が小学生位まで続いていた。その後、会社が保養所等は持たなくなったので、我々の頃は良き時代の最後であったかもしれない。

浦和・本太に住み続けて 73 年、私の人生では、「数」と「人」がキーワードとなっている。本太小・本太中（テニス部）・浦和高（数学部）は徒歩 10 数分、教育大数学科（野球部）は大塚（茗荷谷）へ通う。兼松では、機電本部で西独コンピュータの販売会社 KNC を作り、人事本部で人材派遣会社 KPS を作り、上場準備の KGK と合わせ 3 社で計 23 年と出向の方が長くなったが、この間、KG 及び関連会社の皆様がお客様になり、且つユーザー情報等を頂き、大へん助かりました。ありがとうございました。以上の仕事では、支店網作り等で国内各地への出張も多かったが、36 年間・全て東京勤務で浦和・本太からの通勤だった。58 歳で会社卒業後は、母校浦和高校同窓会事務局長を 10 年務め、広い人脈が更に広がった。兼松 S41 年組は、入社後即、同期会「南十字星の会」を結成し、私が終身幹事となり、毎年 4 月に集まっている。仕事も、「数」と「人」に縁が深かったが、平行して、小・中・高・大学・会社と、幾つもの OB 会幹事を引受け、今では「OB 会開催」が天職となり、忙しくやっています。

「数」と言えば、**我が家の特異数「1220」**があります。前述の様に 1970 年大阪万博の年の **1220** に結婚、私 27、家内 22 の誕生日当日で、そもそも会社の誕生会で知り合ったものですが、2020 年 2 度目の東京五輪の年の **1220** は金婚式で、私 77 の喜寿、家内 72 の年女となります。因みに、子供には **1220** に挙式と入籍が一人づつおり「祝いを弾むよ！と言ったので」、勿論我が家の車はここ何台か続け **1220** です。前の **1220** は息子にあげ、時々 **1220** を 2 台連ねて出掛けています。近所に住む男 5 人の孫達は、私に似て、皆サッカーに熱中しています。〈失礼しました。〉

年頭に当たり、版画の年賀状について、ご披露させていただきます。私は、浦和高校時代の芸術で「美術」を専攻し、「多色刷り木版画」を学び、それ以降、毎年の年賀状は、「多色刷り木版画」にしました。兼松に入ってから、社内報「KG マンスリー」の 1 月号に毎年投稿し、皆様に年頭のご挨拶をして来ましたので、ご記憶にある方もおられると存じます。兼江会ニュース 300 号を祝い、ここにその幾つかを掲載させていただきます。



1954 年 小学 4 年生の時



1967 年 兼松入社 2 年目へ



1972 年 結婚の 2 年目へ



1975 年 長女誕生



一九七七年 次女誕生



一九八一年 長男誕生

(10) 黄 昏「囲碁」談

大阪支部 桜間 善造



兼松の関西囲碁部は、元々関西棋院の流れを組んでいる。

小生が入社した頃は、お金もなく遊びも狭かったので子供の頃少し遊んだことがあった囲碁部に入った。その当時、関西棋院からプロ八段の鈴木越雄先生が毎週教えに来ていた。確か 20 年程来ていた様に思う。部員も 20～30 名居り社内大会も年 1～2 回開催し 40～50 名が参加し盛大だった。対外試合も個人戦や団体戦に数多く参加して来た。記憶に残るのは、実業団の団体戦 A 級で優勝して、賞状が暫くの間役員クラスの応接室に飾ってあった（小生は入っていない）。又、その応接室には、元沖社長の専用の櫃（かや）の七～八寸の碁盤が桐の蓋の付いた緑のビロード布を敷いた立派なものが置いてあった。たまに石を打ってみると少し凹み暫くすると元に戻るような品物であった。

免許については、年 1～2 回昇級試験があり小生も入社した年にチャレンジし、少々インフレだったかも知れないが、初段に合格することが出来た。免許料は棋院の規定により各段ごとに決まっていたが、それに伴う謝礼の方は心付的な意味から規定はなく年令や社内の資格により変っていた。因に初段の私は若年だったこともあり免許料と同額だった。課長級以上になると既定の免許料の 2～3 倍と聞いていた。時代が進み丁度入社 7～8 年目頃、五段の昇級試験の話が出て来たのですが、諸般の事情で辞退してしまった。今にして思えば残念な機会を逃したと思っている。鈴木先生が亡くなってからは、上川先輩の紹介で同じ関西棋院所属の佐藤直男九段（結城聡九段や坂井秀至八段の師匠）のお家の方に年 1～2 回習いに行った。少なくとも 4～5 年は通ったと思う。私が気に入ったのは、先生は素人相手でも多面打はしなかったことです。我々も集中して碁が打てるし、終わったら必ず講評して呉れることでした。

囲碁界も大きく動いている。数年前迄は日本が世界のトップに君臨して来ていたのだが、ここ十年近くは中国や韓国に大きく遅れをとっている。しかし、最近関西にトテツもない大物が現れて来て、現在日本の七大タイトルを総嘗にしている、井山裕太である。頭二つ三つ抜きんで出ている。これを機会に世代交替が進み、二十代の若者が出て来ており、近い将来中国、韓国に追いつき追いつ越して呉れるものと思っている。

もう一つは、「AI」化が進み既に「チェス」や「将棋」の世界ではここ数年前よりコンピューターと対戦で負けかけている。「囲碁」の方はまだまだ十年ぐらい先の事とされていたのだが昨年の四月頃に世界のトッププロの一人の韓国の **李世乭** (イ・セドル) がグーグルのグループが開発した囲碁ソフト「AI アルファ碁」と対戦し一勝四敗で負けてしまった。囲碁もそんな時代に来ているが幸か不幸かは別としてグーグルの方は暫の間開発はやらないと発表された。今後どうなっていくのだろうか。

我々の近況はと云うと、こと 4～5 年前より事務所がなくなり、定例的に集まって一緒に碁を打ったり、大会を開催することはない。場所もさることながらメンバーが段々高齢化するし不幸もあり、又最大の要素の新しい方がいないし入って来ないこと。従って、今は 2～3 の小グループが三三五五に集まって楽しんでいる。その一つのグループは 4～5 名が松本事務所（元 <KG> 社員）で月 2 回、第二、第四水曜日の夕方集まり、3～4 時間碁を打っている。もう一つのグループは元カネヨウ中心のグループで約 10 名程が月 1 回碁会所に集まり楽しんでいる。このグループは囲碁研修会と称して一泊二日の囲碁三昧の旅行をしている。最近では、日本の碁の聖地と云われている広島県の因島に行かれ地元の方々と触れあひながら碁を打たれ楽しかったと聞いている。今迄に 3～4 回この種の研修を行っている。

元々囲碁は個人戦が中心の遊びで兼松がらみの大会はなくなったが、個人的に学校の OB 会、同業者、近隣及び老人会等の中で会に入り、頭脳の健康と親睦に勤め楽しんでいる。

(11) バードウォッチングのすすめ

東京支部 松本 純



野鳥を訪ねて、野山や水辺を歩き回るのは楽しいものです。バードウォッチングは年齢、性別にかかわらず、誰でも楽しめ、特別な用具が無くて大丈夫。必要なのは、あなたの好奇心と、少しの忍耐力です。

バードウォッチングでは、ベテランの人と行動を共にするのが、上達の早道です。その為には、探鳥会に参加することをお勧めします。日本野鳥の会には、全国各地に支部があり、殆ど毎週、探鳥会を行っています。リーダーが親切に指導してくれますので、まず身近な所で行われる、日本野鳥の会主催の探鳥会に、参加してみるのが良いでしょう。こういう探鳥会には、軽い身なりで出かけられますし、日本野鳥の会の会員でない方も、自由に参加できます。双眼鏡や望遠鏡などの観察用具のない方も歓迎されますし、リーダーたちが、遠くにいる鳥も望遠鏡の視野にとらえて、見せてくれます。

バードウォッチングは、基本的には身ひとつで OK ですが、楽しみをより大きくするには、観察用具、野鳥図鑑、フィールドノートを持っていたほうが良いでしょう。

- 1) 観察用具としては、まずは双眼鏡です。倍率は 7 ～ 8 倍が最適。倍率が高すぎると、手振れが多くてかえって見にくくなる。バードウォッチングがいよいよ面白くなってきたら、倍率 20 から 25 倍くらいの望遠鏡と三脚を購入する。また、接眼レンズを交換することで、40 倍、60 倍などの高倍率が、得られるようになっています。いずれも安いものではなく、長く使う用具ですから、名の通ったメーカーのものを購入したほうが良いでしょう。
- 2) 野鳥図鑑は数多く発刊されていますが、コンパクトで、正確さ、美しさ、使いやすさが、選ぶポイントです。
- 3) フィールドノートは、探鳥記録をとるノートで、ポケットに入る手帳タイプがお勧めです。



ヤマドリ

日本固有の鳥で、雄の尾羽は長く美しい。深い山の奥に棲むため、人の目につきにくく、数も少ない。



ヒレンジャク

北半球の寒帯で繁殖し、南へ渡って越冬する。繁殖する数や南のどこまで渡るのかは、その年の木の実のなり方に大きな影響を受けるようである。



オオルリ

高い木の梢で美しい声でさえずっている小鳥。よく茂った林などに住んでいることが多い。雄は上面が青く、胸と腹が白、名前の通り瑠璃色で非常に美しい。



アカショウビン

水辺の森に棲む。速き通るような美しい大きな嘴をかすがに開いて、キョロロロと尻下がりの白い声で鳴く。

(12) 《私の俳句》

東京支部 扇谷竹美



俳句をたしなんでいるとは、おこがましくて人様に言えるような物ではありません。それでも色々な機にそのことが話題になる事もあり、何か知的で高尚な趣味を持っているが如き反応を示されて面食らうことも少なくありません。勿論、俳句とは高尚な知的文芸であることは言を俟ちませんが、私個人に関してはそう言った次元とは程遠く、単に言葉遊びとしての俳句を楽しむことにしています。

私の俳句との機縁は、インドネシアの駐在員に任じていた 1998 年に遡ります。当時、私はジャカルタの奈良県人会の会長を務めていました。この県人会の中に俳句を楽しもうというグループがあり、誘われるままにその一員となりました。俳句グループといっても、当時は初心者の集まりで、指導者がいる訳でもなく、季語を踏んで五七五音でと言う有季・定型の原則を物差しにして作った句を持ち寄り、ワイワイガヤガヤ論評を楽しむという集いでした。

そんな時に、以前木材部の上司であった T さんとの近況を交換する機会が生まれました。そして、私が俳句仲間と交流しているのを知った T さんは、兼江会ニュースに俳句の投稿欄がある、ので提出してはどうか、長年海外勤務をしている貴君が元気であることを知れば旧知の皆さんも喜んで呉れるだろう、と申されました。これが兼江会ニュースへの投稿の始まりです。爾来、私の投句も、兼江会ニュース編集部の皆様の励ましもあり、早、六年を数えます。いつまでも稚拙な初心者の域を出ない私の句を恥ずかしながら掲載を継続して頂いています。



しかし、時々読者の方から句意・用語についてのご質問を頂戴する事もあり、そんな時はそこまで丁寧に読んで下さっている方がおられることを知り、大いなる励ましになると共に、唯々、感謝いたしております。

投稿を続けるかどうか、幾度か逡巡することもありましたが、下手でも良い、継続は力なり、との言葉を拠り所に、折角めぐり合わせたこの道を、趣味を大切にしようと考えています。この欄の読者の皆様も、俳句を始めませんか。難しい俳論は脇に置いて、俳句の先達が薦める「ありのままを写す」作法で試みてはいかがでしょうか。

兼江会ニュース 300 号という偉大なる記念号に敬意を表し、私の俳句にまつわる生活の一端を駄文にして投稿いたします。

“初春や三百号のインクの香”



(13) 俳句

俳句 (東京支部)

松吉健夫

帰り花さえ盛んなる留守の庭
冬帽のこけてポストに笑はるる
トランプを選びし雪の五番街

相川健三

立冬の福島原発壊れたまま
英霊をはらりと隠し菊の紋
冬入り日人生畢竟負け戦

多田 實

鎮^{しず}もりて露千万の猫じやらし
朴の葉の散るを^{つむり}あせらぬ五六枚
十二月八日の頭剃りあぐる

中野湘舎

呉竹の色なき風に夜の揺るる
秋暑しお百度石につと触れて
道の駅の元は舍利殿冬紅葉

扇谷竹美

霜置きて陽に耀へる土の橋
年用意箸に家族の名を書けり
寒月のあまねく照らす地震^{なえ}の跡

本城 清

羽ばたきに気付く赤さや寒千両
カストロの見果てぬ夢よ薦紅葉
背の触れむ狭きおでん屋その旨さ

俳句

(大阪支部)

佐野信幸

熱燗に何はともあれ目の和む
指先でもろくも崩^{くず}る初氷
飛び石をつたへば梅のまだ蕾

今崎良仙

薪能余情に揺れる冬紅葉
添水打つ心弛びを諭しけり
葉擦れとは風の言の葉小春の日

高野清風

(中之島界限三句)
黄落の雨につやめく御堂筋
小鳥来る四肢のびやかな裸婦の像
菊月や雨余の生駒の嶺明かり

大木雄二郎

音もなく猫の寄り来る夜寒かな
釈迦堂を出づれば小路石落の花
ずつしりと軒に吊らるる百奴柿

次号の投句の締め切りは三月二十四日です。俳句を愛好の方、振って投句ください。投句先は、

メール kaji@u08.itcom.net
F a x 03-3729-2208
住 所 〒158-0045

世田谷区東玉川二丁目二、三〇四
梶田順久